



若き心

集まるどころ 1月 (NO11)

茅ヶ崎市立鶴が台中学校長 山口 茂

令和5年1月10日

年末にテレビを見ていたら、『RBG 最強と呼ばれた女性判事 女性たち 百年のリレー』という番組がNHKで放送されていました。アメリカの連邦最高裁判事、ルース・ベイダー・ギンズバーグさんについてのお話でした。

今から100年前、アメリカでもイギリスでも、女性は女性であるというだけで差別されていました。進学や就職も自由にできません。個人が持っている能力が正当に評価されず、ただ、女性だからというだけで、不当な扱いを受けていたのです。女性は家庭に入り家事や子育てに専念するのが当たり前だった当時、女性に参政権などありませんでした。そんな中、一人の女性“エミリー・デービソン”さんが、男性社会の象徴である『ダービー』（イギリスで一番格式の高い競馬）のレース場で、国王の所有する馬に体当たりして女性の参政権を求めました。それまで、イギリスの世論は女性の参政権を求める運動に冷ややかでした。しかし、自分の命と引き換えに女性への差別撤廃を求めたこの行為をきっかけに、少しずつ女性への差別が見直されるようになりました。そして、1928年に『21歳以上の男女全員が投票できる』普通選挙法がイギリスで成立しました。今からたった95年前の話です。

恥ずかしいですが、私は“女性は社会に出て活躍などしなくてよい。家事や子育てに専念すればいい”という考えは、江戸時代に培われた日本人独特のものだと思っていました。しかし、今から100年前までは、日本だけではなく、全世界で女性は不当な差別を受けていたのです。

このテレビ番組の主人公であるルース・ベイダー・ギンズバーグさんは、イギリスでのエミリーさんたちの女性の地位向上に向けた運動に心を動かされ、法律家を志します。彼女は、ハーバード・ロースクールに進学し、その後ニューヨークのコロンビア大学ロースクールに移籍し、首席で卒業しました。しかし、1950年代後半のアメリカでは、それほど優秀な彼女でさえ、どこの法律事務所も雇ってくれませんでした。理由は「女性だから」。当時のアメリカでは女性は主婦になるのが当たり前で、女性だからというだけで就けない職業が多数ありました。

それ以降、彼女は自分の信念を曲げることなく、自分ができることに全力を傾け、弁護士として憲法の定める自由と平等を尊重し、長年にわたりジェンダー差別をはじめとするさまざまな差別と闘ってきました。「ジェンダーに基づく差別は、すべての人にとって傷になりうること」と考え、すべての人にとっての平等のために闘いました。“女性が権利を得るために男性の権利をはく奪する”ような、女性対男性という構図になってしまうことは正しくないという考えのもと、他のマイノリティたちが苦しむ抑圧にも闘う姿勢を崩しませんでした。LGBTQ問題を抱えている人たちや障がい者を持っている人たちが受ける差別の廃止、そして環境問題など、人々が住む世界をより良いものにするために闘い続けました。

そして、1993年にアメリカで2人目となる女性連邦最高裁判事に就任し、性差別の撤廃などを求める判事の代表的存在として、27年間という長い年月、自由と平等のために闘ってきました。

彼女の生きざまをテレビを見て、4月に私が皆さんにお話しした「鶴が台中学校を意味のない区別や偏見による差別などが無い学校にしていこう」という提案が実を結んでいるか振り返ってみました。新入生が入学してくるまであと3か月、その新入生に「鶴が台中学校は偏見や差別のない学校です」と胸を張って言うことができるよう、もう一度皆さんで身の回りのことから見直してみよう。

最後に、彼女の言葉を1つ紹介します。あえて、英語のまま書きます。皆さんならどのように和訳しますか。

Real change, enduring change, happens one step at a time.